

体験しながら学ぶ！ SNS 教育プログラムの開発

－ 3ヶ月間の学級内 SNS 体験と授業の往復から学ぶ －

金沢市立大徳小学校 教諭 山口真希

キーワード： SNS、メディア・リテラシー、エドニティ

1. はじめに

総務省(2015)の調査によると、10代のソーシャルメディア利用率は約80%と大変高く、ソーシャルメディア時代に対応したメディア・リテラシーを初等教育の段階から育成することの重要性が増している。特に利用率の高いLINEは、本実践対象学級の4年生でも29人中6人が活用しているという状況であった。

これまで初等教育において学習にSNSを活用した実践はいくつか見られるが、学習後にSNSを使って相互評価をしたり、学校間交流にSNSを活用したりするものであり、SNSに関するメディア・リテラシーを身につけることを主目的とした実践研究はまだ少ない。そのため、SNSに関する知識や活用能力を身につける機会がないまま、実生活でSNSを活用し始めるという現状が改善されないと感じた。

そこで、子どもたちが、SNSに関するメディア・リテラシーを身につけられるような教育プログラムを考えた。この実践では、実生活でSNSを活用する前に、クローズドな空間でうまくいかない体験をし、そこから考えたこと、感じたことを実生活に活かしてほしいと考えた。そのためには、実際にSNSを運用し、体験することが必要だ。そのような考えのもと、実際に3ヶ月間学級内SNSを体験しながら、その特性を学ぶことができる教育プログラムを作成した。

2. 実践のねらいと方法

2.1 ねらい

メディア・リテラシーの育成を目的とし、子どもたちが実際にSNSを活用しながら、特性を学ぶことができる教育プログラムを作成、実施すること。

2.2 方法

金沢市立X小学校4年生29名を対象に実践した。

実践には教育用SNS「エドニティ」を活用した(写真1)。エドニティはFacebookに似た形式で、記事や写真の投稿、リンクの貼り付け、返信コメントや「いいね」ができる。しかし、機能はかなり限定されており、たとえば、個人間でのメッセージのやりとりやSNS内で友達グループを作るといったことはできない。子どもたちがSNS上でやっていることすべてに教師の目が届くというところが、学習にも適して



写真1 エドニティの画面

いると考え活用した。また、授業だけでなく実生活の場でも体験しなければ、本来ねらいとする学習が十分に行えないと考え、2人に1台のタブレット端末を準備し、休憩中もログインして自由に活用できるようにした。特定の児童のみの活用にならないよう、1日1回はアクセスすること、教師が設定したテーマに合わせ、学習班のメンバーが当番制で投稿することを義務付けた。もちろん当番以外の児童も、投稿したければ自由に投稿できるようにした。

3. 実践内容

3.1 自分たちの手でSNSを楽しむ場にするための議論

1週間SNSを運用した後、その間の投稿を読み返し、SNSにふさわしいな・いいなと感じた投稿と、ふさわしくないな・よくないなと感じた投稿についてアンケートをとり、その結果を配布して、気づいたこと



写真2 投稿について話し合う児童

表1 教育プログラムの内容

	学習内容	身につけたい力
1	擬似チャット体験から感じたことを話し合う中で、相手の気持ちを考えて発信することの大切さを理解する	送り手となる責任を理解する
2	学級内SNSを活用する目的、投稿の仕方やコメント入力の仕方などの操作方法を知り、運用してみる	メディアによる対話とコミュニケーション
3	1週間の間に投稿された記事を読み返し、どんな記事が学級内SNSにふさわしいか、ふさわしくないか個人で考えをまとめる	受け手として情報を読み解く
4	ふさわしい投稿・ふさわしくない投稿についての議論を通して、情報は人によって感じ方が違うことを理解する。また、疑問に思う投稿に対し、自分がどう行動するとよいか考える	情報の受け取り方の違いを理解する 発信者の意図を考える
5	友達の疑問に対して調べて回答することで、SNSは人の役に立てる場であることに気づく	SNSの特性を理解する
6	実際のSNSから、SNSは様々な目的で使われていることに気づく 学習をまとめ、自分たちでSNSを楽しむ場にする方法を考える	SNSの特性を理解する メディアのあり方を考え行動する

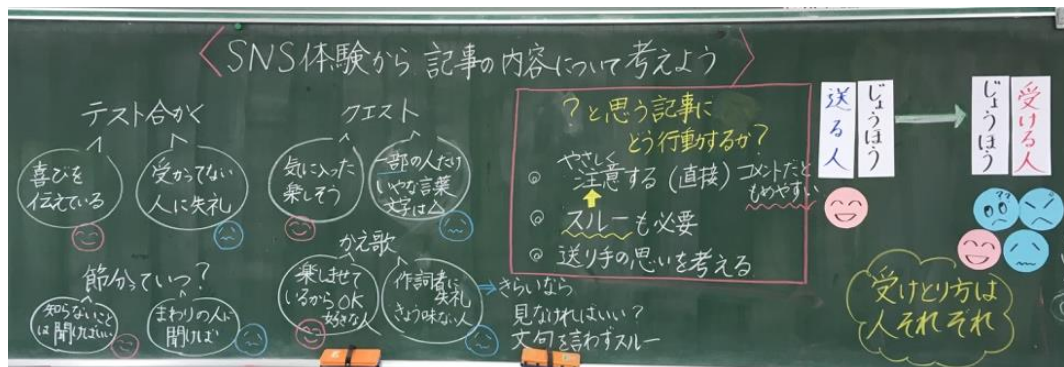


写真 3 4時間目の板書

や自分の考えと違うものについて話し合った(写真2)。すると児童は、1つの投稿に対しふさわしいと感じる人もいればふさわしくないと感じる人もいたり、自分が楽しいと思っている投稿を不快だと思っている人がいることに気づいた(写真3)。例えば「テスト合格したよ!」の投稿に対し、「喜びを分かち合えるからいい」と捉える子もいれば「受かっていない人に失礼」と捉える子もいた。投稿した児童は「自慢するつもりはなくて、うれしい気持ちを伝えたかった」と思っていたこともわかった。学級全体で議論することによって、「情報の受け取り方は人それぞれであること」「送り手の意図が伝わらないときもあること」を実感とともに学習できた。さらに自分が疑問に思う投稿にはどう行動するかにまで話し合いが発展した(写真4)。

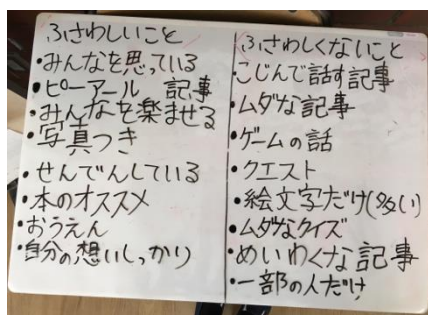


写真 4 あるグループの考え

3. 2 SNSで人の役に立つ体験を

5時間目には、見知らぬ人の質問に対し回答を書き込むようなSNS(ヤフー知恵袋など)を閲覧し、SNSは人の役に立てる場でもあることに気づかせた。

自分たちでもやってみようとして「猫の種類は全部で何種類か」というある子の質問に対し調べてコメント欄に書き込みをした。すると50種類、100種類、300種類など回答がばらばらであり児童はとまどっていた。この体験から、確かな情報を教えてあげられるためには「複数の資料を検討すること」「リンクを貼って情報源を明らかにする」といいことを学習した。この後SNS内では、児童の質問に対しリンクを貼って優しく教えてあげている様子が見られた。

3. 3 実際のSNSを閲覧して、学級内SNSでは経験できない特性を理解する

実際のSNS(FacebookやInstagram)を児童に見せ、自分たちのSNSとの違いを考えさせた。実際のSNSには広告があったり、広告とわからないようにコメント欄から誘導するものがあったりする。また、迷子の犬を探してほしいという記事を拡散して人助けに

役立つ投稿があれば、うその情報を拡散させている投稿もある。これらの現状に気づかせることで、多くの人にすばやく情報が広がるというインターネットの特性を利用して、SNSも様々な目的で使われることを学習した。ここから、自分たちのSNSを楽しみ場にするにはどうすればいいか話し合い、みんなでルール作りを行うことができた(写真5)。

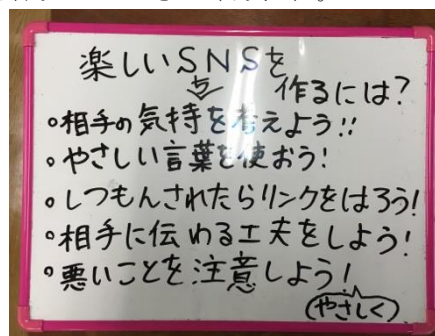


写真 5 児童が話し合って作ったルール

4. 成果

授業前後の質問紙調査の結果から、児童はメディアによるコミュニケーションの力を伸ばし、SNSの特性を理解したことがわかった。特に「人に自分の考えを伝えることが好きだ」と考えるようになった児童が増えた。これは普段直接対話をしない友達にも気軽に発信できるというSNSの特性や、コメントやいいね!をもらえるという双方向性のある対話によるものだと捉える。また「情報の受け取り方は人によってちがう」ことへの理解も深まっていた。これは投稿に対しどう感じたかの議論によって実感できたと考えられる。

授業後の感想では「自分も他の人も楽しく会話や情報交換できるSNSにしたい」「SNSは文字だけだから、本当の気持ちが伝わるような書き方を工夫したら仲良くなれる」「SNSは人に情報を教えてあげたり、うれしいことをわかちあったりして友情が深まる」という記述が多く見られ、自分たちで気をつけたり考えたりすればSNSは絆を深めるものになると捉えている児童がほとんどであった。

5. 今後に向けて

SNSの特性として、アフィリエイターの仕組みなど本実践で扱わなかったものもあるので、今後も子どもたちが学べる仕組みを考えていきたい。この実践を受けた児童も、数年後にはほとんどがSNSを実生活で使うことになる。その時に、この学習で感じたことや学んだことを思い出し、自分にとって有益なコミュニティを、自分達の手で作ってほしいと切に願う。